

タイトル

【夜活】忘れられない思い出の味ってありますか？

本文

こんばんは、悠です。

今日はいつもと違う時間にメールを送ってみました。

今回のように

夜の時間に送るメールを【夜活】として

いつもと違った

ちょっとプライベートな内容をお届けしていきます。

1回目の今日は

僕の初恋の話をしていきます。

正直この話めっちゃ恥ずかしいので

あんまりお伝えしたくなかったんですけど、

食べ物の力ってすごいなと思うようになった

とても大きな出来事だったので

恥ずかしいのをこらえてお伝えします笑

僕は、中学生の頃に

初めて恋をしました。

相手の子をAちゃんと呼びますね。

Aちゃんとの出会いは保育園でした。

短い黒髪の落ち着いた雰囲気の子で

初めて会った時の穏やかな笑顔が印象的でした。

その笑顔に惹かれてずっと気になっていたけど、

引っ込みじあんだった僕は  
結局保育園を卒業するまでに、  
Aちゃんと一緒に遊ぶような仲にはなれませんでした。

さらに、Aちゃんと僕は小学校の学区が別々だったので  
保育園を卒業してから6年間  
会うことはありませんでした。

あっという間に小学校も卒業し、  
僕は地元の公立中学校に進学しました。

そうしたら、  
保育園の時に気になっていたAちゃんが  
同じ中学校の同じクラスにいたんです。

(ウソ、同じクラスじゃん！まじかすげえ嬉しい！)

中学生になったAちゃんは  
背もすっかり伸びて  
黒髪も綺麗なロングストレートになっていました。

姿は少し大人っぽくなくても  
保育園のころと変わらない笑顔に  
僕はひと目で恋に落ちました。

でも、当時の僕は引っ込みじあん継続中で  
話しかけたいけど話しかけられない。

グループ学習とかで同じ班になるときは自然に話すことができたけど、  
ちょっとした雑談とか、何気ない会話とか  
気軽に話しかけられるような仲にはなれませんでした。

思春期真っ盛りの中学生だったので、  
異性に話しかけるのがとにかく恥ずかしくて。

それでも頑張って話しかけようものなら、  
野次馬みたいな男子に  
「つきあってんのー？笑」っていじられるし。

そんな状況だったので、  
好きな子にはなおさら  
話しかけるなんてできなくて

遠くから見つめているだけで精一杯でした。

そんな近づきたいのに近づけないもやもやをずっと抱えたまま  
時間だけが過ぎていきました。

せつかく3年間同じクラスだったのに

放課後一緒に勉強することも  
文化祭を一緒に見て回ることも  
地域のお祭りに誘うことも

最後までできませんでした。

当時の僕は勇気をふり絞って  
頑張って少しずつ話しかけるように努力していたので、

思いは伝えられないけど

朝おはようって挨拶したり、  
さっきの授業難しくなかった？って少し聞いてみたり、  
たまに教科書を貸してもらえたり、

そんな普通のクラスメイトくらいにはなれていたと思います。

でも、

卒業式が近づいてくるにつれ僕は焦りました。

Aちゃんと僕は違う高校に進学予定だったからです。

しかも、僕の進学する高校は30キロ以上離れた場所で  
Aちゃんの通う高校とバスの路線も全く違います。

卒業したらもう会えなくなることはほぼ確定でした。

「このままじゃ片思いで終わっちゃう」

「もっと仲良くなりたいたのにそのチャンスもなくなってしまう」

そこで意を決して、  
卒業式に告白しよう！と決めました。

今でも鮮明に思い出します笑

雪が溶けかかっている学校裏の道路で、  
たまたま一人で下校していたAちゃんに  
勢いだけで話しかけて

「明日卒業式終わったら  
話したいことがあるから駐輪場まできて」

と伝えました。

(なんで駐輪場やねん！と思うかもしれませんが、  
駐輪場が一番人目につかなかったんです笑)

これだけでも卒業式後に何を言われるかなんて予想が付きそうなものですが、  
その子は少し考えたあとに「いいよ」とだけ言ってそのまま帰っていきました。

僕は正直、このアポ取る段階で断られると思っていたので、  
逆にびっくりしてその場でしばらく立ち尽くしていました。

仲の良かった友達がその後たまたま通りがかって、

「そんなとこでっ立って何してんの？」

と言われるまで、

道路の真ん中でフリーズしていました。  
(あぶないw)

その日はもう自分でもよくわからないテンションでしたよ。

呼び出しOKだったことで舞い上がりそうになり、  
いやでも振られるかもしれんから平常心平常心……

いやでももしかしたらいけるかもしれんし……！

あーでも振られたらどうしよう！！！！

どうしたらいいんだー！！！！

あの時の僕は  
5分毎に表情が喜怒哀楽をループしていましたねw

挙動不審すぎて、  
誰かに見られていたら絶対通報されていましたw

次の日卒業式で早く寝ないといけないのに、  
もう緊張で心臓落ち着かなくて  
結局よく寝られませんでした。

朝起きて、いつもの5倍くらい鏡とにらめっこして身支度して  
親から学校に送ってもらいました。

僕が妙にそわそわしてるので、  
運転してくれていた父から

「卒業式そんな緊張するか？笑」

と言われて、

卒業式後のことで頭がいっぱいだっただ僕は

「あー……うん。まあね……」

と煮え切らない返事をしていました。

父は不思議そうな顔をしていましたが、それ以上は何も言いませんでした。

学校について、朝のホームルームの時にふとその子のほうを見ると

Aちゃんも僕の方を見ていたようで目が合っただけでそらすという。

さっきのなに！？  
僕のこと気になってる！？  
さすがにちがうよなー...  
でも僕の方見るってことは気になってるってことだよな！？

とかいろいろ考えちゃってホームルームどころじゃありませんでしたw。

もちろん式なんて上の空で、「在校生、起立」で卒業生の僕が立ち上がりそうになりました。

そのまま3時間くらいの式をやり過ぎて、ついに約束の時間がやってきました。

僕は式が終わってすぐに駐輪場へ向かい、先にAちゃんを待っていました。

待つこと数分、Aちゃんがやってきました。

もうね、時間まで覚えてます。

16時20分でした。

いざその子を目の前にすると、  
考えていた告白の言葉なんて全部どっかに飛んで行って

何話したらいいのかわからなくなりました。

「卒業したね」

「そうだね」

「なんかあつという間だったね」

「うん」

もっといい話題はないか自分よ・・・！

この時ほど、  
自分のコミュニケーション力の低さを呪った時はありませんでしたね。

結局いい話題は思いつかなかったので、  
少しの沈黙の後  
腹をくくって本題を伝えることにしました。

「あのさ、実はずっと前から好きでした！高校は別になるけど、良ければ付き合ってください！」

.....

.....

.....

.....

「ごめんなさい」

そのままその子はどこかに走って行ってしまいました。

まあそうだよね。

Aちゃんからしたら、ただのクラスメイトだし。

初めから無理だったんだ。

精いっぱい自分を慰める言葉を考えていましたが、  
あふれる涙はとまりませんでした。

泣きすぎて呼吸も苦しくなってきて  
その場にうずくまるようにして、  
そのまましばらく泣いていました。

泣きすぎて苦しいのか  
失恋したことで苦しいのか

ぐちゃぐちゃの心じゃ判断つかなくなっていたけど  
自分の心に大きな穴が空いたことだけは  
はっきりとわかりました。

そうこうしてる間に、親が迎えに来てくれる時間になっていました。

泣いたあとはできる限り消して、  
「ただいま！」  
と車に乗り込みました。

たぶん声は震えていたし、  
笑顔もうまく作れていなかったけど  
できるだけいつも通りの自分を演じていました。

帰りも迎えは父でしたが、  
そんな僕を見て何かに気づいたんでしょうね。

車の中で

「おー、おかえり」

「なんか食べたいものある？」

と聞いてくれました。

僕は甘いケーキが好きだったのと  
こんな頑張った今日くらいいいだろと思って

「ミルクレープが食べたい」

とリクエストしました。

僕の父はお菓子作りが得意だったので、

5歳の頃までは  
誕生日に手作りのケーキを作ってもらっていました。

でも、もうしばらくお菓子を作っているところを  
見たことはありませんでした。

家に着くと、  
父はおもむろに台所に立ち、  
リクエストしたミルクレープを作ってくれました。

生クリームとチーズクリーム半々くらいのミルクレープで、  
口の中が甘ったるくなるくらい甘い。

でも、失恋したあとの心には  
その甘さがしみこんでいきました。

父は何も言葉にはしなかったけど  
励ましの気持ちがミルクレープから伝わってきて

それまで我慢していた涙がまた溢れてきて  
めちやくちゃ甘いミルクレープなのに  
甘いんだかしよっぱいんだかわからなくなっていました。

でも、  
僕のズタボロになった心を癒すには  
十分すぎるほどあったかい味をしていました。

「こんな美味しかったっけ？笑」

父の優しさを素直に受け止めるのが恥ずかしくて、  
僕はちょっと茶化してしまいました。

でも、

「んー？美味かったならよかったよ」

そう言って父は自室に戻っていきました。

その後残りを1人で食べていたけど、  
不思議と1人で食べている感覚はしませんでした。

父が近くで見守ってくれているような、

そんな味でした。

このミルクレープがあったから、  
僕は少し前向きになることができました。

この時の味は今でも忘れられません。

街中のケーキ屋さんでミルクレープを見かけると、  
失恋のしょっぱさと父の優しさをいつも思い出します。

それからというもの、

自分も人の気持ちを前向きにできるようなものが作りたいと思って  
お菓子作りにのめりこんでいきました。

大人になって結婚した今でも

妻が落ち込んでいて元気がない時や  
記念日に感謝を伝えるときは  
いつも手作りのミルクレープを作っています。

僕は、この経験を通して  
子どもを思う父の  
深い優しさと愛情を感じることができました。

失恋は  
心に穴が空くほど  
苦くつらい経験だったけど、

父の温かい優しさに癒されて

忘れられない思い出になりました。

たとえば、

「部活の試合で負けて帰ってきた時、  
晩ごはん、  
次は勝てるよ！って母が作ってくれたカツ丼、  
元気出たなあ」

って経験から、  
大人になってからも  
悔しい思いをしたらカツ丼を食べて元気を出す。

みたいな。

そんなことってありませんか？

ミルクレープもカツ丼も、  
食べたら無くなってしまふものだけど、  
その時に感じた親の気持ちや優しさって  
ずっと記憶に残って忘れないものですよね。

だから、

気持ちのこもった食べ物は、  
食べてなくなった後も  
人の心をずっと支え続けてくれるって思えるんです。

僕は過去  
偏食が原因で  
食べることが辛い、苦しいと思っていたことがあります。

でも、食には辛いことだけでなく  
愛情を伝えることができるということも

知ることができました。

なので、

僕と同じように  
偏食で食べることに辛さを感じている子どもたちが

愛情を受け取ることで  
少しでも前向きになり  
食べることを楽しめるようにしていきたいなと思っています。

少し長くなっちゃいましたが、  
これでおわりたいと思います。

最後まで読んでいただき  
ありがとうございました。

それでは、おやすみなさい。

P.S.

もしあなたにも、

忘れられない味がある！とか、

この経験で食べられるものが増えた！とか

お菓子作り好きです！とかあれば笑

ぜひ返信で教えてくださいね。